近年の南部杜氏出稼について

神 山 忠 雄

岩手、秋田両県のほかの杜氏集団が減少を示している(松田 1975)ことから、杜氏など酒造出稼を取り巻く環境は、今日かなり変っていると思われる。南部杜氏は、1971 年以降は一貫して漸増傾向にあり、1975 年 6 月 1 日現在では 421 人を数える。南部杜氏の移動は、太平洋側東北地方と北海道地方という南北型長距離移動性(川本 1951)であったものが、最近では関東地方から近畿地方にまで及ぶ傾向にある(図)。岩手県外の南部杜氏の就業先企業 348 社に対して行なったアン

南部杜氏の出稼先分布(上 1956 年, 下 1975 年)

ケート調査(1975 年実施・回収率 72.4%)によると、他県杜氏から南部杜氏に変わった企業は 85 社である。このうち交替前は越後杜氏であったものが 62 社(72.9%)、丹波杜氏が 11 社(12.9%)であった。すなわち南部杜氏の進出は越後杜氏の減退を補う形での進出であるといえる。

南部杜氏のこのような進出現象と農家経営規模との関係を、南部杜氏出稼の中心地である紫波郡紫波町の杜氏農家 152 戸(154 人)について検討した。この結果、東北・北海道への出稼者 87 人と関東以西への 67 人について、それぞれの農家経営規模別の割合にはほとんど差異は認められない(表)。また、出稼先の都道府県ごとに農家経営規模との関係を相関グラフから判断したところ、相関関係がほとんど現われない。以上のことから、川本(1951)が指摘した農家経営規模と移動距離との関係が、少なくとも紫波町では不明瞭になってきていることを表わしている。

農家出稼の発生における農業の外部要因の重要性はすでに報告されているが(青柳 1976)、南部杜氏のこのような存続も、企業の統廃合による出稼先の拡散、地元の労働力吸収の力、出稼賃金など、農業の外部要因に影響されているものと考えられ、さらに吟味の必要がある。

調査にあたり御協力いただいた南部杜氏会館事務長伊藤政美氏、及び紫波町農業委員会の皆様に謝意を表します。

(1976.9.18 受理)

文 献

- 青柳光太郎(1976): 東北における出稼農家分布の変化とその要因 東北地理 28 33~40
 川本忠平(1951): 南部杜氏の移動範囲と其の距離的性格の一考察 人文地理 3 30~43
 松田松男(1975): 酒造出稼の存続についての一考察 日本地理学会予稿集 9 189~190

	99 a 未満	100 a ~	200 a ~	300 a ~	400 a ~	500 a ~	計
東北・北海道	6 人 (6.9%)	41 (47.1)	31 (35.6)	5 (5.7)	3 (3.4)	1 (1.1)	87 人 (100%)
関 東 以 西	5 人 (7.5%)	29 (43.3)	21 (31.3)	8 (11.9)	3 (4.5)	1 (1.5)	67 人 (100%)

Nanbu-tôji as a Side-job of Farmers

Tadao KAMIYAMA

Gradually *Nanbu-toji*, migratory brewery workers, have increased in number and extended in work-place. Formerly, they moved to work mainly to Tohoku and Hokkaido, but recent years their business extends as far as Kanto and Kinki (Fig.). The principal cause is

the decrease of *Echigo-toji*, their competitors. The writer could not recognize so distinct correlation between the farm management scale and the movement distance (Table) as in Kawamoto's report(1951).